

「1人の百歩より100人の1歩」を 様々な共同学習・プロジェクトを実施

大津市立瀬田小学校 石原一彦教諭（前・平野小学校）

<プロジェクト以前>

私は、教員に採用された当初からコンピュータの教育利用に興味がありました。最初の赴任校である唐崎小学校（昭和59年から平成元年）でも、BASICで計算ドリルのプログラムを作成し、子どもたちの教育活動に取り入れ、効果のあることを確認していました。また、文部省（現・文部科学省）の科学研究費補助金でMacintoshを購入し、ハイパーカードを使ってオリジナル教材を作成し、算数の授業やクラブ活動で利用していました。

実践の経過、教訓

すぐに高学年の教室も接続

平野小学校（平成2年から10年）は、大津市内のコンピュータ導入の先進校で、教育ソフトを自作したり、Macintosh同士をネットワークに接続していました。こうした活動を続けている時、財団法人コンピュータ教育開発センター（CEC）より100校プロジェクトの参加募集があり、ネットワークを使って行っていた取り組みのことを書くと、採用になったのです。



100校プロジェクトではサーバとクライアントが各1台ずつ供与されましたが、クライアント1台では十分な教育活動はできないと考え、中古PCを購入したり、他の教職員と一緒に校内LANを整備。その結果、各普通教室（高学年）や職員室にもLANに接続されたコンピュータを配備できました。

「一人の百歩より百人の一步」を合言葉に他の先生と手を取り合って実践授業を行い、インターネットの教育利用の様々な可能性を追求していきました。高学年の児童一人ひとりにメールアカウントを発行するなどの先進的取り組みもこの当時から行っていました。

私は「全国発芽マップ」、「琵琶湖共同学習」、「フィルタリングソフトの運用実験」などさまざまな共同学習・プロジェクトを実施（参加）してきましたが、最も印象に残っているのは、100校プロジェクトでは「全国おたずねメール」、100校プロジェクト以降では「teiten2000」です。（囲み欄参照）

「全国おたずねメール」は、子どもたちにはキーボードやメールソフトの利用法などリテラシーが育っていなかったため、その課題を解決するために実施したものです。最大時には100名以上の登録があ

全国おたずねメール

全国おたずねメールは、小中学生の疑問に答えてくれる「メールボランティア」を全国から募り、そのリストを一覧にしたもの。平成7年度の平野小学校における生活科の授業を契機に、100校プロジェクトのメーリングリストやパソコン通信の各種会議室にその趣旨を書き込み、ボランティアを募集するといった形ではじまり、同年9月に正式に100校プロジェクトの共同利用企画に決まった。

ボランティアのリストには「得意な分野」欄があり、子どもたちはその欄を見て誰に質問すればいいかを探して質問をする。高学年の児童全員にメールアカウントを発行していた平野小学校では、5年社会科「伝統工業」の授業で、全員の児童に全国おたずねメールを利用させる実践も行われた。

<http://www.cec.or.jp/es/100school/ayumi/h8jisshi/otazune.html>

teiten2000

文部科学省の平成12年度予算「教育用コンテンツ開発事業」で開発を委嘱された「定点観測システム」。全国10か所（当初）に電子百葉箱と景観カメラが1ユニットになった観測装置を設置。気温・気圧・雨量・風速などの気象データと10分ごとの定点撮影写真がインターネットでリアルタイムで提供されている。「広域定点観測網実証コンソーシアム」が開発。現在は18か所に設備が設置されている。

<http://www.teiten2000.org/>

りました。「teiten2000」は100校プロジェクトで実践された「全国ライブカメラマップ」(「定点観測データの共同利用」)を受けて、正式なコンソーシアムで構築した全国規模のプロジェクトです。

また、日本教育工学会からの研究委託で「国際調査隊」を実施し、海外の日本人学校と国際規模の調べ学習を行ったり、『『ごんぎつね』の遠隔共同学習』として全国7校と遠隔共同学習を実施し、教科にICTを活用する有効性を確認しました。さらに、千葉大学教育学部附属中学校と実施した「小中一貫した情報倫理カリキュラムの開発」では、後年「ネット社会の歩き方」プロジェクトに参加する素地が作られました。



台風の進路を考えさせる

ネットワークの有効性を実証

私がこうした実践を続けているのは、100校プロジェクトの時に抱いた「ネットワークが子どもの学びに役立つことができるのか」という課題に応えるために、様々なプロジェクトを実践しながら、実証しているのだと思います。

現在の私のキーワードは、「ユビキタス」と「ステルス」です。いつでもどこでもアクセスできる環境下で、システムが子どもたちにとって空気のように目に見えない存在となりつつある中で、いかに子どもたちを支援できるかを追及していきたいと考えています。

10年間を振り返って

「子どもの喜ぶ姿」がICT活用の原動力

ICTを活用した活動での子どもたちの生き生きとした、喜ぶ姿が、自分の喜びにもなり、「また続けよう」という気持ちになります。また、他校の教員や、その他の方々とある時は自分が励まし、ある時は励まされと、人とのつながりがあることも継続の要因です。

< 成功の秘訣 >

ICTを活用し成果をあげるためには、次の5点が重要だと思います。

「子どもの視点」から外れない

ICTの活用は、「子どもが将来どう変わるか」、「授業を受けた子どもがどう思うか」といった「子どもの視点」を常に考慮する必要があります。ここから外れては駄目です。

常に最終形を意識して実行する

ICTを活用するかどうかは目的ではありません。ICTを使ったときの最終形を意識し、上記の観点から判断し、望ましいと判断できる場合は実施すべきですが、望ましくないと判断した場合は実施すべきではありません。

チームワークを大切に

教育はチームワークがあってこそ成果を出すことができます。コミュニケーションを指導する教師がまず率先して人と人とのつながりを大切にし、積極的につながっていかねばなりません。

奢らないこと

ICTを活用した授業をしていると、つい自分が「すごいことをしている」、「偉い」と勘違いすることがあるので、気をつけて実践する必要があります。

百人の一步

「子どものためになるのはどちらか」と考えた場合、「一人の百歩より百人の一步」の方が良い。昔に比べて最近ではICTが使いやすくなり、先行者と後に続く人との境界があいまいになってきており、「先行者が少し後押しすれば良い」という状態になってきています。

< 今後、ICTを活用する上で重要なこと >

設備や環境が問題になる時代は過ぎ、今後は学びそのものが問われる時代になると思います。15年度、ユビキタスの研究プロジェクトでクラス内の希望する子ども全員に携帯電話を冬休み中貸し出しました。普段話さない子や男女間も携帯電話でコミュニケーションを楽しみながら学んだようで、3学期になってクラスの雰囲気が変わり学習や話し合いが活発になりました。コミュニケーション能力の活性化により、人のつながりや学びが深まった例かもしれません。